

筑波大学が原点

丸山正美

前筑波大学学務部学務第1課総務係長

現群馬大学学生部入試課長

私は、平成15年4月、群馬大学の入試課に転任になった。筑波大学を離れて8年が過ぎようとしている。

筑波大学から、総合研究大学院大学に学務課の補佐として赴任した。総研大は、特色のある大学で、博士後期課程(3年)のみの大学院大学である。

総研大から、初めて課長職で小山工業高等専門学校に平成13年4月に転任になった。私事ではありますが、2年間の内で小山高専で貴重な経験をした。長い公務員生活で始めて体調を崩し、入院したことであった。この入院騒ぎは、自己管理の不摂生からと思われ、長年連れ添ったタバコの煙とも別れを告げることとなったし、これまでの公務員生活を振り返る良いきっかけとなった。そのような中で筑波大学から、30周年記念のための「フォーラム」への投稿のお誘いがあり、自分でもそういう年齢を重ねたかと思ってお引き受けすることとした。

すべての始まり

話を戻すと、昭和49年4月に筑波大学学務課に東京教育大から転任した。新構想の大学で、学部を持たない。事務は集中管理方式で(大学概要の組織図などでお馴染みの)大学の教育研究全体を支えることとなっている。転任当初は、建物も無く教育現場としては甚だ貧弱であったように思う。それを補ったのが、当時集まった教官や事務官の新しい大学を作る意気込みではなかったかと思う。しかし、現実には「フレッシュマンセミナー」ということで、オリセンでの布団運び、体芸棟完成に伴う教室整理等で、事務というより肉体的労働が多かった。本格的に授業が始まったのは、夏を過ぎた頃からであった。筑波大学創設期は、成績処理等の事務電算化(当初は巧く動かず手作業もした)に伴うルーチ的な仕事の繰り返しで明け暮れた。事務部門は、教育組織の完成とともに毎年の様に様変わ

りし、そこで培われた筑波での仕事が、現在の私にとっての仕事の原点で、困った時などは、今でも、筑波大学を頼りにしている。それでは、筑波大学でどんなことをしてきたのだろうか？学務課を皮切りに大学院課、研究協力課、調達課、教育機器センター、国際交流課を経る中で、仕事の経験だけでなく、多くの人と関わることを含め幅広い経験を積ませて頂いた。

幅広い教育とそれを支える事務

人事の巡り合わせで学務課へ係長として戻り、教務の仕事の本格的に取り組み筑波大学の教育組織のあり方など、創設時の構想を理解することが出来たのはこの時であった。赤羽第二学群長とカリキュラム編成の中で、特に総合科目の編成では毎年苦勞をした。筑波大学には教養学部はなく、どこで入ってくる1年生の基礎を磨く？それが、全学群・学類が垣根を低くし、他の学群・学類生を受け入れ、全ての教官が教養教育を担うことと、更に総合科目において、各学群・学類が誇りを持って提供できる教養科目、専門入門のための科目の提供、又、教養教育を担う教育関係のセンターで科目を一元的に行う等幅広く教育していくための方策について、夜を徹して話し合った。本来、筑波大学のナンバー学群は、専門性の高い或は深い教育を目指した教育

体制を選らず、幅の広い学生を育ていくことを目標とし、専門学群は、深く専門性の探求をする学生の育成を目指して来たはずであるが、最近の情報紙によると、筑波大学の「教養教育」が落ちていると聞き創設当時の精神が無くなっているのではとのショックを受けた。

アイディアが大学の活性化を生む原動力

事務に関していえば、筑波大学では、新しいアイディアが多く生まれる土壤があった。今では一般的になっているが、初めての全学群・学類のシラバスの作成(暗中模索で作った)理科離れが騒がれるなかで、高校生を対象に一泊二日の体験入学(全国から1000名近くの応募があり、当時の原副学長などに選考をお願いした)旧式化した教育用設備品の更新計画のアイディアの採用等、全国の国立大学の先駆的な存在であった。

今、大学が大学院重点化、独法化等大きく変わりつつある中で、もう一度、筑波大学の創設の原点に立ち返って見ることも必要ではないだろうか。

最後に、最近読んだ官城谷先生の「青雲はるかに」の中にあった孟子の「為すこと有らんとする者は、辟(たと)えば井(せい)を掘るがごとし。井を掘ること九仞(きゅうじん)なるも、泉及ばずしてやむれば、

なお井を棄つとなす。」という言葉を贈りたいと思います。

改めまして、筑波大学創立30周年おめでとうございます。

まるやま まさみ